



ひかり

令和6年2月27日
第11号



心が動けば 行動は変わる

2月5日の全校朝礼で、生徒会役員が全校生徒に向かって次のように語りました。

生徒会よりお知らせです。

多くの尊い命が犠牲となった能登半島地震から1か月が経ちました。<2,500>と書いた大きな紙を見せながら約2,500戸、これは現在もお停電が続いている住宅の数です。電気がない生活を、皆さん、想像できますか？<14,000人>これは、現在、避難所で生活されている方々の数です。感染症など、関連死につながる可能性のある環境での生活を強いられています。<400人>これは、集団避難をしている公立中学校の生徒の数です。そのうち260名の輪島市の中学生は、地元から120kmも離れた場所で生活をしています。住み慣れた故郷で生活できない不安は計り知れません。<18,700人>これは、石川県で現在、ボランティアの事前登録をしている方々の数です。日本中の人たちが被災地を支援するために立ち上がっています。学校生活がある私たちが現地へ行って手助けをすることは困難です。しかし、生徒会で被災地のために私たちにできることはないかと考え、和光中学校をあげて募金活動を行うことにしました。私たちには、自由に使えるお金がたくさん無いかもしれません。1円からでもかまいませんので、復興への願いを被災地へ届けましょう。

続いて、「現在、被災地では復興に向けてさまざまなボランティア活動が行われています。」と語り、以下のそれぞれの写真について丁寧に説明しました。



そして、最後に「明日、2月6日から8日までの3日間、朝7:30から生徒玄関前で募金活動を行います。ご協力をお願いします。」と呼びかけました。努力の甲斐(かい)あって「53,328円」が集まり2月14日に「日赤令和6年能登半島地震災害義援金」として郵便局より送金することができました。

また、2月22日のコラム音読で、4メートルを超す津波に飲み込まれた石川県珠洲市三崎町寺家下出地区の住民全員が無事避難できたという記事を読み、改めて自然災害の恐ろしさや避難訓練の大切さを痛感しました。下出地区の大半が高齢者であったのにもかかわらずたった5分で全員が避難できたのは、東日本大震災以降、地震と最大13.5mの津波を想定して高台に集会場を設け、集落と直結する100段の階段を作り、そして、何より『なにかあったら集会場』を合い言葉に訓練を続けてきた結果でした。音読後の感想に「訓練が命を救ったと分かった。非常時を生き抜くために『実践力』を身につけたい。」と記されていました。今、我々にも南海トラフ地震に備える実践力が求められています。



2学期末の校外学習として1年生が自転車で「財田町内探訪」をしたときのことで、日枝神社に着いたあるグループの人が何も言わずにほうきを持ってきて掃除をし始めました。

小さい頃、友達と駆け回っていた楽しい思い出の場所を今も大切に思う気持ちが行動に表れたのでしょう。